

イエス・キリストの福音

新約聖書には13の使徒パウロの手紙がある。パウロはそのほとんどの手紙を当時の手紙の形式にしたがって書き出しているが、ローマの信徒への手紙の挨拶の部分(1～7節)には、幾つかの際立った特徴がある。その一つは第1節の自己紹介の言葉である。彼は言う「キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び出され、召されて使徒となったパウロ」。この短い挨拶の言葉の中に、神の恵みに対する使徒パウロの信仰と感謝の告白が表されている。

彼は自ら使徒となったのではない。ただ神の恵みによって救われ、神の福音のために選ばれた、召されて使徒とされた。この自分の救いと使徒職への任命という出来事の中に彼は一方的な神の恵みを見た。その神の恵みへの驚きと畏れがこの自己紹介の言葉に込められている。

それでは「神の福音」とは何か。彼がそのために選ばれ、そのために召され、そのために使徒としての務めに任じられた、その福音とは何か。彼はそれを2～4節で語る。

この福音は、神が既に聖書の中で預言者を通して約束されたもので、御子に関するものです。御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められたのです。この方が、わたしたちの主イエス・キリストです(2～4節)

この短い言葉の中に、福音とは何か、キリスト教信仰の中心的内容が実に凝縮された形で教えられていると言っていい。

第1に、それは「神の」福音であって、如何なる意味でも「人間の」福音ではないということが強調される。キリスト教信仰は、今から二千年前に、「イエス・キリスト」という類いまれな宗教的天才が現れて、素晴らしいことを行ない、素晴らしいことを教え、人々を魅了した、その教えとその宗教を有り難く信じるというようなものではない。

それは神が旧約の昔から預言者たちを通して繰り返し約束された罪の贖いと赦しの約束、その約束がイエス・キリストの到来において実現したこと、このイエス・キリストこそ神の御子であり、約束のメシアである、という驚くべき宣言なのである、これが福音の第1点である。

第2に、その福音の内容は何か。ダビデの子孫としてこの罪の世にお出でになられ、十字架の道を歩まれ、世の罪を負われて十字架の上で死なれた、しかし、神の力により死の力を打ち破られ、力あるメシアとしてご自身を表された、これが福音であると、パウロは言う。

福音とは、単なる観念ではない。単なる宗教的願望でもない。それはイエス・キリストの受肉と十字架と復活という歴史的出来事において実現された罪の贖いと赦しという神の恵みのみ業なのである。

続けてパウロは言う、「わたしたちはこの方により、その御名を広めてすべての異邦人を信仰による従順へと導くために、恵みを受けて使徒とされました。この異邦人の中に、イエス・キリストのものとなるように召されたあなたがたもいるのです。」この歴史において実現した神の恵みが今や私たちにも注がれている、私たちもまたその恵みに召されている、救いは一方的な神の恵みの賜物なのである、これがパウロが語る福音である。